

## 半田の春祭り

半田の春祭りの起源は明確ではありませんが、1755年の記録には、簡素な山車行列やからくり人形の上演が見られます。当時、半田は江戸（現在の東京）へ向けて主に出荷される酒の生産地であり、賑わう港町として栄え始めていました。19世紀初頭になると、半田の商人や醸造家たちの富により、豊作を祈願する地元の春の神事のために、精巧な彫刻を施した大きく華麗な山車を造ることが可能になりました。

現在、半田の春祭りは市内で行われる数多くの春祭りの総称となっています。祭りでは、合計31輛の山車が半田の町を練り歩きます。大きな山車は重さ6トン、高さ7メートル、小型の山車でも4トンの重さがあります。山車には、花や鳥、想像上の生き物などをモチーフを刺繍したタペストリーで装飾されています。また各山車には独自の彫刻装飾や浮彫、日本および中国の伝説や歴史の場面を表現したジオラマがあしらわれています。これらのタペストリーの意匠や彫刻、ジオラマは、数世紀にわたりますます精緻になってきました。20輛の山車では、祭囃子や掛け声、三味線や琵琶の音に合わせてからくり人形が演じられます。

山車は、半田市内10地区の通りを、3月中旬から5月上旬にかけて少数ずつ巡行します。各町内からの参加者は、それぞれ独自にデザインされた法被を着て、笛や太鼓による特色ある祭囃子を奏でます。特に印象的なのが、5月3日・4日に行われる「亀崎潮干祭」で、ユネスコ無形文化遺産に登録されているこの祭りでは、5輛の山車が海浜へと曳き下ろされます。伝説によれば、この場所は神武天皇が紀元前7世紀に東征の際に上陸した地とされています。

半田市立博物館で展示されるものを除いて、祭りの終わりには山車は解体されて格納されます。また5年に一度、秋に市役所周辺で開催されるはんだ山車まつりでは、31輛すべての山車が一齐に曳き揃えられます。